

カトリック高松教区（大船渡プロジェクト） 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター（5）

発行人 高松教区サポートセンター 2012年7月1日発行
編集 谷口広海
寄付 郵便振り込み：カトリック高松司教区
01650-7-13208
(お振込の際はTSCへの寄付の意向を必ずご記入ください)
tel:070-5512-6810 Email:tk-koho@mxi.netwave.or.jp

東日本大震災仙台教区復興支援第2回全国担当者会議 (2012/6/11～13)



6月11日から3日間にわたって日本カトリック司教協議会が主催する上記担当者会議が行われ、高松教区からは大阪教会管区大船渡プロジェクト責任者：諏訪栄次郎司教とTSCから谷口助祭が参加した。全国担当者組織（オールジャパン）が立ち上がって1年余りが経過し、被災地における支援活動状況とそこに関わる課題、その課題を踏まえてのこれからの支援の在り方を探ろうと今回の会議の開催となった。

支援活動状況とそこに関わる課題を確認するため2日間を現地視察に充て、3日目は仙台教区司教座聖堂にて、各支援ベースの責任者及び支援活動を後方から支援する組織の責任者たちを登壇者とするシンポジウムが行われた。第1部は原発被害が薄い岩手、宮城地区、第2部は原発被害が顕著な福島地区と分けて行われ、地域性が有する特有の問題についての説明がなされ、各々が問題を共有し協力して支援に当たることが確認された。最後に被災し亡くなられた方、行方不明の方、今もって苦しみの中にある方々のためにミサを捧げて散会した。

谷口助祭が参加した現地視察ツアーレポート

現地視察ツアーは 福島県南部、 福島県北部、 札幌教区宮古ベース、 長崎教会管区大槌ベース、 大阪教会管区大船渡ベースの全5コースが設定され、谷口助祭は コースに参加した。

宮古教会は実質十数人の小さな共同体であり、自らも被災者である。そこで札幌



教区が主体的に関わりを持ち、常駐するベース長はじめ、スタッフと現在北海道から1週間交代でボランティアを送り込むシステムを立ち上げて活動している。尚、支援司祭として長崎教区から若い司祭が派遣されている。

本コースのスタートとして近くに設置されている河南（かなん）仮設住宅にお邪魔し、集会所で被災した方々とひと時交流をもった。8名程のおばあちゃん方が出向いて下さっていたが、平均年齢は77歳、7名が独り暮らし、2名は今回の津波で夫を亡くされていた。とても明るく冗談も交えながら、

気丈に振舞われていたが、天気が悪く、独りで仮設住宅にいる時には決まって津波のことが頭に浮かび、しばしば気が塞ぐと話された方もあった。高齢化し、身体の自由もままならず、収入の道は閉ざされた中での生活再建の可能性はほとんどないと云うのが実状であり、接した私達の印象でもある。仮設住宅は狭く、冬は暖房も効かず、本当に辛い思いをされたとのことである。



これからの支援の在り方

現在の復興支援は物（物資）から心の支援に移行し

つつあるようだ。震災当時は被災者同志心を一つにして助け合っていたが、

生活に目途がついた今、全てを失った人への支援における格差への不満が表面化している。その中で、支援させ立場からも、これから先の物質的支援お米券などの商品券による個々のニーズの支援の在り方にシフトすることが現実的であると言うのが大方の見方のようなのだ。この後、宮古市では甚大な災害を被った田老地区に移動し、世界一と謳われ、高さ十数メートルを誇っていたが津波に呑まれた堤防に登って被災地を見まわした。未だに復興の兆しを感じられない現場の状態にこの先の困難を改めて実感した。この後も同じメンバーとマイクロバスで大槌ベース、大船渡ベースを他コースメンバーと合流を繰り返しながら想像を絶する被害状況が広がる陸前高田、南三陸などでは、地元の職員さんなどから説明を受けるなどして全行程約400キロを走破した。



ある程度その日の人々と一部被災し噴出する事態も起っていた提供している現金、あるいはズに的確に対応で

被災地でのジレンマ

今、自力復興に向けて被災商店主の皆さんたちは仮設商店街を立ち上げて、地元復興をはかっています。その中であって、たとえば支援物資である靴などが周りの被災者に配られたとします。そうすると、仮設で営業を始めた商店にとっては物資支援とは云っても、営業妨害以外の何物でもありません。そこで、これからはそれを必要としている個々の被災者に対して、その費用の一部を援助する商品券（金券）を以て地元商店で購入してもらうことによって、地元経済への助けとなり、被災者支援となるプログラムを進めることが望まれています。その意味ではTSCが現在取り組んでいる「お米券」は地元にとって理想的な支援の形と言えるのではないのでしょうか。

シンポジウムより

カトリック教会が当初から目指していた「寄り添う支援」はこれからも、特に福島における放射能からの避難で人口減少が続く地元で生活せざるを得ない被災者から、教会と云う見える形で共にとどまり、そこに明かりを灯すことによって信頼され、安心して受け入れられることで、共にいて下さるキリストの愛の

証となれることでしょう。私たちは他の支援団体が次々と引き揚げていく中であって、これから先もずっと共にとどまり力となることを目指します。特にこれからは支援の狭間で見落とされがちな自分ではどうにも動けない切実な状況にある障害者への支援にも心に向け、活動に当たらなければなりません。

被災地は未だ復旧段階であるといった方がよいかもしれません。どんなに頑張っても復興と云う段階には達していないように思えるような状態です。復興には多分あと10年という単位でしか思い描けないところかもしれません。阪神大震災後17年経った今もなお、カトリック教会は黙々と寄り添った活動を続けています。規模の上で阪神大震災の何倍もの痛手を被った東日本の被災者と被災地には、やはり幾10年と云った寄り添いの支援が続くことでしょう。

現在の大船渡ベースの活動項目

- ・買い物送迎サービス/普通乗用車免許（水曜日午前・日曜日午後）
- ・仮設住宅訪問 ・仮設住宅集会室での作業や出前カラオケの支援
- ・被災家庭訪問 ・ベースでの喫茶サービス、小物づくり
- ・社会福祉協議会へのボランティア派遣
- ・その他要望に応じて

大船渡ベースブログ <http://ameblo.jp/ofunatobase/>



大船渡ベースでのミニコンサート風景



大船渡ベース活動後の分かち合い

TSC は 現 在 も

お米券キャンペーン推進中です

TSCとしての公式な支援活動は全信徒が身の丈に応じて、だれでも、いつでも、何処にいてもすぐに参加できる「お米券」という形での支援活動だけです。これはこれからも弛まず続く支援の在り方として、信徒の方々に余り負担をかけず、額としては少なくとも皆が結集すれば大きな力になると信じているからです。ですから、各地区、ブロック、小教区、グループ、あるいは個人での活動は大いに推奨されることです。これらの活動はTSCへの報告義務はありませんが、皆様の報告によって、教区内でどのような活動がなされているかを全信徒が知るチャンスになります。出来ればTSCへご報告くだされば幸いです。

高松教区サポートセンター

大阪教会管区 大船渡プロジェクト

(2011年12月～)

お米券キャンペーン!

被災された人たちに
賞味期限を知らない隣人愛
愛の奇跡に貢献してみませんか

息の長い支援の在り方として最適のがたち!

TSC

大阪教会管区（名古屋・大阪・京都・広島・高松）は
大船渡ベース（地ノ森いこいの家）で活動しています

ボランティア募集中!

TEL 070-5512-6810 E-mail:tk-koho@mxi.netwave.or.jp

いつもお心にかけていただきありがとうございます。たくさんのお米券をいただき心から感謝しています。東日本大震災から1年以上たち、外見上目に見えて仮設店舗、改築が進んでいます。が、目に見えにくい生活の実態は大変厳しい状況にあるということが在宅訪問などでわかってきました。「みなし仮設」での生活、自宅は被災を免れたものの仕事を失った人たちは日用品他、糊口をしのぐ困難を抱えておられます。そのような方々に生活の足しにと、皆様からお預かりした「お米券」をお渡ししています。また、ベースが必要なお金にも少しいただいています。今後ともよろしくお願いいたします。カリタスジャパン大船渡ベース「地ノ森いこいの家」Sr.野上幸恵

お米券支援報告（2011年12月7日～2012年5月31日現在）

これまで皆様からお預かりした（お米券としての）現金と現金の総計
・現金 1,634,657円
・お米券 159枚 （79,500円相当）

大船渡ベースへ（2012年1月13日）
・現金 1,000,000円
・お米券 45枚 （22,500円相当）

大船渡ベースへ（6月11日）
・現金 600,000円
・お米券 114枚 （57,000円相当）

大船渡へお渡しした現金とお米券の総計
・現金 1,600,000円
・お米券 159枚 （79,500円相当）

これまでの皆様のご支援に心から感謝申し上げます。これからも変わらぬご協力とご支援を下さいますようお願い申し上げます。